秋田県現代俳句協会会報

No.96
令和７年３月８日
印刷 ㈱八郎潟印刷

発行者 秋田県現代俳句協会
会長 森田千技子
事務局 〒〇一九―〇七一五
横手市増田町八木一二三
片倉弓
TEL 〇一八二―四五―二一三三

令和六年度 第三十回

秋田県現代俳句協会 作家賞

春の水

北秋田市 佐藤君子

囀りに呼応口笛吹いてみた
樽洗う顔に弾ける春の水
生き急ぐまい散る桜手のひらに
はつ夏の空に近づく歩道橋
青葉窓開き束の間女です

ががんぼの二の足踏んでいるばかり
合歓の花友の真白き骨拾う
落ち栗やりすは母より忙しい
籠耳の気楽でよろし鵙日和
恋なんて縁なし軒の赤南蛮
友の塚白鳥渡り風渡り
葉隠れの柿の見えたり数独解く
初霜や野良猫どうしているかしら
野草茶をじっくり煮出す雪催
悠悠とボトルシップや冬ごもり

受賞のことば

舵を切る

佐藤君子

外は雪、冬は少しゆっくり出来て嬉しいです。と言うのも、春から初冬までは野菜作りと漬物作りで、毎日があっという間に過ぎてゆきます。

覚束なくなった頭では思い出せないくらい前に、一度だけ作家賞に応募したことがありました。俳句を始めて何年目のことだったか、句作に夢中になっていた勢いで。でも、佳作賞を戴いた喜びは忘れずにいます。

今は日々の忙しさに流されて俳句と向き合う時間がとれず、このままでいいのかと自問自答したり、導いて下さった師の言葉が浮かんできたり、この辺で舵を切らねばとー。

句会での勉強?や雑談も楽しく、なるべく休まずにと思うのですが、野菜作りは時期を逃せずで、思うようにいかないのが現状です。

このような私の句を選んで下さった選考委員の皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

作家賞選考経過

選考委員長　片倉俊秀

第三十回秋田県現代俳句協会作家賞の選考委員会が十二月二十一日、秋田市協働大町ビルに於いて開催された。森田千技子会長をはじめ、加藤昭子、船越みよ、三浦静佳、片倉俊秀の五名全員が出席し選考にあたった。今年度の応募作品は昨年より三編多い十編であった。作品は事前に担当者により、ワープロで活字体化され、無記名で各委員に届けられた。各委員は作品を事前に検討し、選考委員会に臨むことが出来た。選考委員長には片倉俊秀を選任した。

はじめに本年度は総数が十編ということで一編ずつ丁寧に議論を重ねることを確認した。各委員からは感想や疑問、意見等が忌憚なく出され作品理解が深まっていった。誤字や表記上の誤り、助詞の使い方等も話題に上がった。十作品の検討・議論が終わってから、最後に各委員に一位から五位までの順位を付けてもらった。集計の結果、全員の委員が上位をつけ合計点が一位を占めた「春の水」が作家賞にすんなりと決まった。二位は「やはらかき日々」と「悼む秋」が並び、続いて「大冬木」であった。「やはらかき日々」と「悼む秋」は、それぞれ出来栄えも良く、それぞれの持ち味があり、句柄も違うところから甲乙がつけがたく、両者を同点順位とし準作家賞とした。そして次に点数の多い「大冬木」を入選とした。

今回の選考委員会で話題になった一つに、「助詞」の問題があった。俳句は十七音、一音の重みは計り知れない。一句の中で様々な顔をみせる助詞の働きを理解することは、俳句の詩的世界をより豊かに広げることに繋がる。改めて俳句における言葉の表現の難しさを痛感した。

準作家賞

悼む秋

秋田市　鈴木修一

萩すすき風雲を駆く高速路
叔父の身を引き取る一歩秋暑し
人界の木々鉾立ちに悼む秋
温顔の触れなば秋冷の巌よ
抱き易き白木の箱よ秋の雨
一花ずつはらむ雨粒蕎麦の花
蟷螂のいのち潰えし舗道かな
今日と呼ぶ予期せぬ明日秋の風
空白の時を息づき秋の蝶
朝顔や芥出しの路水流れ
青山と定めし山か秋澄める
和やかに語る叔父像秋ざくら
日だまりの永遠なる想い赤とんぼ
秋ゆくと落暉をもやす男の眼
稲刈のなごりの夜気に憩いけり

準作家賞

やはらかき日々

横手市　片倉弓

水門のリスリンの照り夏つばめ
夕焼けはきらひと言ふ子の遊歩道
むにゆむにゆと笑ふ猫の目茗荷の子
お互ひにそしらぬふりの屋敷蛇
曼珠沙華墓苑近くの一等地
空青し羽毛のやうに秋の蝶
エアメール蓮の実すべて上を向く
いちじくや君は今でも無口かい
十月のあはき頭痛の朝の雨
旗ふりの安全靴や芋畑
小鳥来る子のやはらかき笑ひ声
秋深しゆつくり開く父の文
人参引く手にのる笑ふ岩偶かな
お目当てのガチャガチャ出たる冬の虹
食器棚の端に豆本冬灯し

入選

大冬木

大潟村　田村陽子

はじめての障子洗いや母仕上げ
おはじきの音坪庭の薄氷
手毬歌肥後がどこかも知らない子
お手玉や欅の椽の温もりて
シェアしてるバレンタインのハムサラダ
ぶらんこ漕ぐ視線の先は土星の環
逃げ水を追って鼻緒の切れにけり
麦秋や畦の姉妹の絵書き歌
水掻いて古里掻いて蓴採
終戦日寝息の中にある平和
刈田道おもちゃ揺らして猫車
いちじくのあめ色時のゆるく過ぎ
遺されし句集繙く十三夜
月光に濾過されてゆく老後かな
大冬木加齢をどんと受け止める

選後寸感

選考委員　森　田　千技子

○作家賞「春の水」

・囀りに呼応口笛吹いてみた
・恋なんて縁なし軒の赤南蛮
・葉隠れの柿の見えたり数独解く

豊かな自然の中から作者の口笛が聞こえてきそうだ。足取り軽やかな感性が、生活に密着した季節の移ろい一つ一つに呼応している。取り合わせの巧さも光る。縁のない恋と軒の赤南蛮、柿と数独といった独自の発想が句に屈折を生み微妙に響き合っている。

○準作家賞「悼む秋」

・叔父の身を引き取る一歩秋暑し
・温顔の触れなば秋冷の巌よ
・今日と呼ぶ予期せぬ明日秋の風

思い出深かった叔父の死がテーマ。死を悼み、受け入れ、別れるまでの揺れ動く心情が時間の経過を追って的確に且つ柔軟に描写されている。温顔と秋冷の巌の対比。その独自な把握。秋風が運んで来る無常観。抑制された哀しみが痛い。

○準作家賞「やはらかき日々」

・お互ひにそしらぬふりの屋敷蛇
・秋深しゆつくり開く父の文
・人参引く手にのる笑ふ岩偶かな

屋敷蛇と共存し、時には父の文に教えを乞い、引き抜いた歪な人参を見て「笑ふ岩偶」と捉える柔軟性。生き方を自らが構築し暮らしに彩を添えている。平凡な景に内面を語らせる作者の手法は巧み。

○入選「大冬木」

・ぶらんこ漕ぐ視線の先は土星の環
・終戦日寝息の中にある平和
・大冬木加齢をどんと受け止める

ぶらんこから土星の環への虚構仕立て。寝息から、紛争の絶えない世界を憂い、平和の有難さ、世界平和をしみじみ願う。自身の老いには正面から向き合う姿勢。視野の広い安定した句が並んだ。

○惜しくも入賞を逸した作品群から共感句を挙げ、次回の挑戦を期待したい。

・秋の雲足の向くままノンシャラン
・一途なる縄綯う父の大胡坐
・たたずみて雪の白さに裁かれし
・夜鷹鳴く村の会議の始まりぬ
・初鞴の深海魚の目飛び出たる
・冬ざれの出羽の雫か馬場目川

選考寸感

選考委員　加　藤　昭　子

○作家賞「春の水」

・樽洗う顔に弾ける春の水
・はつ夏の空に近づく歩道橋
・ががんぼの二の足踏んでいるばかり
・野草茶をじっくり煮出す雪催

四季を通じて自然に呼応。豊かな暮らしぶりを気負いなく詠う。日々の一瞬を無理なく表現。温みのある句群に好感。春の水のいきいきとした感触。初夏の空の輝き。ががんぼの

動きは自身と重なり心象の深さを思う。春の多忙に向けて束の間のゆっくりした時を過ごす。

○**準作家賞「悼む秋」**

・叔父の身を引き取る一歩秋暑し
・温顔の触れなば秋冷の巌よ
・抱き易き白木の箱よ秋の雨
・一花ずつはらむ雨粒蕎麦の花

親族の死に直面した時間、悼みが伝わって来る句群。残る暑さの中、亡骸の手触りは死を諾う一瞬に変わる。抱える白木の箱の重さは悲しみを増幅させる。蕎麦の花の一粒ずつの雨は涙のようだ。腹の奥底より沸く哀しみというより、死を諾い送る役目の立場を感じた。

○**準作家賞「やはらかき日々」**

・水門のリスリンの照り夏つばめ
・お互ひにそしらぬふりの屋敷蛇
・エアメール蓮の実すべて上を向く
・お目当てのガチャガチャ出たる冬の虹

水門に飛んで来る燕と水の照り、夏そのものの光だ。どちらかと言えば気味悪く嫌われ役の蛇、屋敷蛇となれば別、守り神はやり過ごす。蓮沼の見事さ。大人だってガチャガチャが好き。虹は祝福のように。全句が柔らかく好感。

○**入選「大冬木」**

・おはじきの音坪庭の薄氷
・大冬木加齢をどんと受け止める

おはじきを弾く音と薄氷の割れる音、春めく音と捉えた。加齢をものともせず、大冬木は作者の気概そのもの。元気を頂いた。

○**共鳴句**

・泥だらけ花びらを背に馬洗う
・雪催母に頬紅さしてやり
・郭公の遠音も雨に濡れにけり
・解体の家跡小さし春夕焼
・初耀の深海魚の目飛び出たる
・冬隣テレビに映るハワイアン

❖選考寸感

選考委員　片倉俊秀

自分自身の感動に正対し、どう十七音に凝縮するか。俳句の醍醐味だ。

○**作家賞「春の水」**

・樽洗う顔に弾ける春の水
・ががんぼの二の足踏んでいるばかり
・落ち栗やりすは母より忙しい
・恋なんて縁なし軒の赤南蛮
・悠悠とボトルシップや冬ごもり

内容が多彩であり、一句ずつ独立した秀逸の句群である。俳味の効いた句もあり楽しく詠んだ。特に「ががんぼ」が二の足を踏むという表出が素晴らしい。体に似合わず臆病な表情が目に浮かぶ。

○**準作家賞「悼む秋」**

・萩すすき風雲を駆く高速路
・人界の木々鉾立ちに悼む秋
・抱き易き白木の箱よ秋の雨
・一花ずつはらむ雨粒蕎麦の花

叔父の突然の訃報に接し動揺する主人公。叔父へ思いがつのる。主人公の内面の意識を比喩的表現により、イメージ化を図っている。衝撃の深さがよく表出されている。

○**準作家賞「やはらかき日々」**

・水門のリスリンの照り夏つばめ
・お互ひにそしらぬふりの屋敷蛇
・エアメール蓮の実すべて上を向く
・食器棚の端に豆本冬灯し

季語との取り合わせが見事な句群。重厚感を持たせ景を広げている。「リスリンの照り」と「夏燕」のコラボがいい。

○**入選「大冬木」**

・おはじきの音坪庭の薄氷
・水掻いて古里掻いて蓴採
・月光に濾過されてゆく老後かな
・大冬木加齢をどんと受け止める

自分の一生を振り返っている句群である。全体がバランスよく配置され句が整っている。「加齢をどんと受け止める」主人公がいる。

○**その他共感した句**

・一途なる縄綯う父の大胡坐
・たたずみて雪の白さに裁かれし
・老木に日干し夜干しの鵙の贄
・秋の雲足の向くままノンシャラン
・初鞠の深海魚の目飛び出たる
・産土や雪の王国醸し出す

詩情豊かに

選考委員　船越　みよ

昨年度の七編より応募数が増えたことに安堵している。読者の心にすんなり入ってくるやさしい詩情の句が多かった。

○**作家賞「春の水」**

・ががんぼの二の足踏んでいるばかり
・友の塚白鳥渡り風渡り
・葉隠れの柿の見えたり数独解く
・野草茶をじっくり煮出す雪催

「ががんぼ」の動きの特徴からの把握が見事。二句目、白鳥の飛来に友を亡くした現実が蘇る。「渡り」のリフレインが効果的。平明でありながら季語との配合を生かした生活感のある作品である。

○**準作家賞「悼む秋」**

・温顔の触れなば秋冷の巌よ
・一花ずつはらむ雨粒蕎麦の花
・蟷螂のいのち潰えし舗道かな
・青山と定めし山か秋澄める

叔父を悼む気持ちと秋の季節感の調和が心地良い。喪失感の中で蕎麦の花や蟷螂など自然界に生きるものに慈しみの情を抱く作者の心の在り様が伝わってきた。

○**準作家賞「やはらかき日々」**

・むにゆむにゆと笑ふ猫の目茗荷の子
・お互ひにそしらぬふりの屋敷蛇
・秋深しゆつくり開く父の文

優しい柔らかな日常の生活感がテーマ。表記も漢字が少ないので見た目の柔らかさもある。むにゆむにゆのオノマトペと茗荷の子の配合の不思議。途中に切れのない句が作品の柔らかさに関わっている。

○**入選「大冬木」**

・水掻いて古里掻いて蓴採
・刈田道おもちゃ揺らして猫車
・月光に濾過されてゆく老後かな

子供の頃の回想から老いを迎えた現在ただ今の古里に生きる想いが伝わってくる。回想の句は懐かしさが先行するので句数を押さえて構成することも一考か。

○その他共感した句

・抽出しに父の戦地記夏の月
・早朝の雪靴きゆつと悲鳴あげ
・郭公の遠音も雨に濡れにけり
・解体の家跡小さし春夕焼
・廃線の鉄路の先の初日の出
・冬ざれの出羽の雫か馬場目川

❖それぞれの句の世界

選考委員　三浦静佳

○作家賞「春の水」

・樽洗う顔に弾ける春の水
・はつ夏の空に近づく歩道橋
・ががんぼの二の足踏んでいるばかり
・落ち栗やりすは母より忙しい
・悠悠とボトルシップや冬ごもり

感覚の効いた深みのある句群であった。ポジティブな作者の今が見えてくる。春の水の煌めきを体で感じ、はつ夏の空と歩道橋の間に自身を置く。二の足を踏むようながんぼに作者を重ね、りすの様子から母を連想。そしてボトルシップと冬ごもりの配合の妙。

○準作家賞「悼む秋」

・叔父の身を引き取る一歩秋暑し
・人界の木々鉾立ちに悼む秋
・一花ずつはらむ雨粒蕎麦の花
・和やかに語る叔父像秋ざくら

叔父を悼んだ連作。悲しみに流されず表現したところが読み手にじんわりと伝わる。ぶつけようのない悲しみを木々の鉾立ちに託した。真白き蕎麦の花のはらむ雨粒、遺影の叔父は何を語っているのだろうか。

○準作家賞「やはらかき日々」

・水門のリスリンの照り夏つばめ
・空青し羽毛のやうに秋の蝶
・エアメール蓮の実すべて上を向く
・いちじくや君は今でも無口かい

作者ならではのゆったりとした佳句。特に水門と季語の取り合わせが巧み。無口だった君への語り口調にも惹かれた。表現の工夫があればと思う句が何句かあり残念だった。

○入選「大冬木」

・ぶらんこ漕ぐ視線の先は土星の環
・終戦日寝息の中にある平和
・大冬木加齢をどんと受け止める

構成に作者の工夫が見られた。土星の環、寝息こそに平和を感じる。大冬木は作者の気概そのものだろう。

○入賞には至らなかったが共感した句

・抽出しに父の戦地記夏の月
・雪の朝全ての音が無くなりぬ
・郭公の遠音も雨に濡れにけり
・一塊の集落墓も雪囲
・春闌くや出漁前のエンジン音
・鼻かんで海馬を巡る秋の海

令和六年度 作家賞応募作品（到着順）

①父
②悼む秋
③ふるさとの雪
④鳥と共に
⑤やはらかき日々
⑥ノンシャラン
⑦大冬木
⑧春の水
⑨鬼やんま
⑩「冬葎」

令和六年度第三十回作家賞の応募数は、十編で、前年より三編増えました。年々減少傾向にあった中での増加は嬉しいことであり、更に、その内の半数が初トライであったことは、秋田現俳としても大きな喜びでした。心から感謝致します。

新作十五句をまとめて応募することは大変なエネルギーを要しますが、日頃の自分とじっくり向き合う好機にもなると思いますので是非とも今回応募された方々を含め、俳句愛好者の皆様が果敢に挑戦して下さるようお待ち致しております。

令和六年度 定例総会・俳句大会・懇親会

三月九日、総会は、物故者への黙祷から始まり、感謝状の贈呈、作家賞表彰のあと、五年度の事業報告・決算報告並びに六年度の事業計画・予算が承認された。また役員改選で勇退の竪阿彌放心会長から森田千技子会長の新体制に。

午後からは、第三十九回現代俳句秋田県大会を開催。大会には六十六名の方々から二百四十四句の応募があった。大会では竪阿彌放心新顧問が「私が出会った俳人」と題して講演。次に特定選者選評、成績発表、表彰と続き情報交換を含めた懇親会を開催して大会は盛会裡に終了した。

◆特定選者選

竪阿彌放心　特選

白鳥来るどこへも行けぬ兄に来る　佐藤二千六
搾乳の牛のふりむく初日かな　浅野　法子
熊眠る光る体のやわらかさ　片倉万葉子

片倉　弓　特選

佐保姫の途中下車です駅ピアノ　五代儀幹雄
履歴書に持病書こうか冬木の芽　向田久美子
広島忌水に躓くことのあり　柴田　悦子

藤原貢太郎　特選

水の音血のめぐりだす拓地春　田村　陽子
点滴器連れて白鳥待つ五階　五代儀幹雄

空け放つ母の部屋にも初暦　齋藤みどり

◇**現代俳句協会長賞**

凍滝のでこぼこ父の気骨かな　加藤　昭子

◇**秋田県現代俳句協会長賞**

片言を覚えて桃の日の主役　布施　鷹夫

◇**秋田県芸術文化協会長賞**

見かけほど強気ではなしラ・フランス　船越　みよ

◇**秋田県俳句懇話会長賞**

搾乳の牛のふりむく初日かな　浅野　法子

第三十一回　秋田県吟行俳句大会

六月に年一回開催。吟行地の選定については、集合し易い場所、大会会場費などの経費少額などを考慮。高齢会員からは足腰も弱まり参加できにくいとの声もあり、次回は写真や物などを持ち寄り、屋内での即吟俳句大会などの案も出て検討中である。

○**竪阿彌放心　特選**

うどん屋の隣は教会青嵐　加藤　昭子

○**森田千技子　特選**

咲く力溜めて静寂蓮の池　藤原貢太郎

○**高点入賞句**

咲く力溜めて静寂蓮の池　藤原貢太郎

緑陰に影を忘れてまた戻る　森田千技子

会へるなら蓮の舟にものりませう　片倉　弓

父の日の一人ぶらぶら広小路　藤原貢太郎

○**入賞を除く一人一句**

最下位と思えぬ県都初夏の騒　木村和影女

人声に賑はふ広場風涼し　菅原ミヤ子

あめんぼう群成し遊ぶ旧車会　片倉　俊秀

花は葉に古さは魅力旧車会　泉屋おさむ

ＡＩの世の与次郎悲話よ杜涼し　船越　みよ

草むらの草より青い雨蛙　大川　悦子

新緑の園は家族の日曜日　武田　光子

きつね像四肢に守る子夏の空　首藤　圭

梅雨近し枝を広げて鷹の松　竪阿彌放心

令和六年度　俳句を語る会

七月二十日、ゲリラ豪雨に見舞われ、途中参加を断念した会員もいた中での開催。俳句について大いに語りあった半日だった。

◆**雑詠の部（高点句）**

ねぢ花や左の眉は描きにくい　片倉　弓

行々子舌にも欲しきすべり止め　船越　みよ

◆**詠み込みの部「旅」（高点句）**

列島の端っこが好き夏の旅　片倉　俊秀

◆**入賞を除く一人一句**

梅雨晴間靴と軍手と籠を干す　木村和影女
鳴き交わす蛙が夜を深くする　泉屋おさむ
緑陰にわわっと旅の変声期　森田千技子
ほととぎす飯盒の飯吹きこぼる　佐藤二千六
大皿の潮の香旅の初鰹　田村　陽子
伐採の順番待ちとか栗の花　米倉美千子
大旅行の斜め横断大毛虫　首藤　圭
旅に病む冷房はよく効いている　竪阿彌放心
八月の色紙はみ出す兜太の句　加藤　昭子

第三十八回　現代俳句東北大会

（紙上大会・山形県）

◆**現代俳句協会長賞**

八月に座り続ける父がいる　大仙市　加藤　昭子

◆**秋田県現代俳句協会長賞**

つぎの樹へラジオを移し桃をもぐ　北秋田市　五代儀幹雄

◆**宮城県現代俳句協会長賞**

父は仮名母はカタカナ昭和の日　秋田市　小林万年青

◆**山形県現代俳句協会長賞**

草の花残り時間は端役でいい　能代市　船越　みよ

◆**秀逸賞**

夏草や仔牛も牛の声を出す　能代市　戸田佐江子
一村を毀さぬように田水張る　横手市　佐藤二千六

◆**佳作賞**

くちなわの力を抜いた跡がある　秋田市　小林万年青
水辺まだ蛍の闇になりきれず　井川町　森田千技子

木嶋玲子特選

バス停に手話の少女等風若葉　美郷町　戸澤　陽子
高野ムツオ特選

夏草や仔牛も牛の声を出す　能代市　戸田佐江子
安部克詠特選

雪隠は母泣くところ麦の秋　北秋田市　五代儀幹雄
渡辺誠一郎特選　鈴木三山特選　松宮梗子特選

父は仮名母はカタカナ昭和の日　秋田市　小林万年青
久保純夫特選　佐怒賀正美特選

くちなわの力を抜いた跡がある　秋田市　小林万年青
森田千技子特選

父という錆れたことば桐の花　秋田市　小林万年青
さいとう白沙特選

かげろうや上手に嘘をつくスマホ　三種町　三浦　静佳
加藤昭子特選　畠山カツ子特選

草の花残り時間は端役でいい　能代市　船越　みよ
春日石疼特選　名久井清流特選
坂下遊馬特選　堀尚子特選

四戸美佐子特選
八月に座り続ける父がいる　大仙市　加藤　昭子

五日市明子特選
句帳みな小さな遺産雁来紅　北秋田市　五代儀幹雄

鈴木正治特選　大類つとむ特選

堀尚子特選　川村英幸特選

佐怒賀正美特選
つぎの樹へラジオを移し桃をもぐ　北秋田市　五代儀幹雄

森田千技子特選
ブレーキの効かぬ過疎です蝉時雨　大仙市　加藤　昭子

四戸美佐子特選
組まれつつ竿灯脈を打ちはじめ　秋田市　丹生　千賀

加藤昭子特選
この舟にのると言ふ母蓮の花　横手市　片倉　弓

川村英幸特選
相棒となるやも知れず金魚飼ふ　横手市　片倉　弓

宮崎哲特選
万緑や吾子両の手に塩むすび　大潟村　田村　陽子

畠山カツ子特選
体内に灯る九条ほととぎす　潟上市　佐々木香代子

佐竹伸一特選
腹帯の腹蹴る力柏餅　八郎潟町　帆村　類

第六十一回 現代俳句全国大会（於・奈良）

◆**関西現代俳句協会会長賞**
蟬の樹から少年剝がれてくる夕べ　秋田市　小林万年青

◆**特別選者特選**
蟬の樹から少年剝がれてくる夕べ　秋田市　小林万年青

久保純夫特選二位
反抗期真っ只中の唐辛子　横手市　大坂　和子

小菅白藤特選二位

◆**一般選者特選**
散骨の海おだやかに昼の月　秋田市　和田　仁

佐藤文子特選一位
曲がるだけ曲がり胡瓜や父になる　大仙市　加藤　昭子

浦川聡子特選
老いてなお筆真っすぐに天の川　井川町　齋藤　幸子

岡部榮一特選
田水張る村は丸ごと豪華船　横手市　佐藤二千六

河村正浩特選
津波後の海たをやかに雁帰る　秋田市　和田　仁

鈴鹿呂仁特選
鉛筆の匂いに蛍が入ってくる　秋田市　小林万年青

中井洋子特選
蟬の樹から少年剝がれてくる夕べ　秋田市　小林万年青

中内亮玄特選・羽村美和子特選
まだ人の形でいます冬ごもり　秋田市　小林万年青

中村正幸特選・村松二本特選
八月や一番ながい黙禱す　秋田市　小林万年青

渡辺和弘特選

秋田県現代俳句協会役員名簿

顧　問	北秋田市	五代儀幹雄	幹　事	北秋田市　泉屋おさむ
〃	八郎潟町	舘岡　誠二	〃	北秋田市　大川　悦子
〃	秋田市	種村聖巴子	〃	能代市　岸部　吟遊
〃	潟上市	竪阿彌放心	〃	横手市　木村和影女
〃	秋田市	小林万年青	〃	にかほ市　齋藤みどり
会　長	井川町	森田千技子	〃	大潟村　田村　陽子
副会長	大仙市	加藤　昭子	〃	羽後町　藤原貢太郎
〃	横手市	片倉　俊秀（幹事長兼任）		
〃	能代市	船越　みよ（会計兼任）		
事務局長	横手市	片倉　弓		
監　事	三種町	三浦　静佳		
〃	秋田市	鈴木　修一		

編集後記

会報九十六号をお届け致します。令和六年度の総会にて選出された新役員の名簿（令和七年現在）を掲載致しました。新執行部二年目の今年は秋田県現代俳句協会発足四十周年にあたり、竪阿彌顧問と片倉副会長が中心になってこの十年の歩みを小冊子にまとめて下さいました。感謝申し上げます。会員の皆様には会報と一緒にお届け致します。

東北大会（九月予定）が秋田で開催されます。昨年の山形大会は紙上大会でしたが秋田大会は対面大会となることが決定しております。大会ご案内の折は会員皆様が多数参加して秋田大会を盛り上げて下さるよう宜しくお願い致します。

役員の皆様も引き続きご支援ご協力をお願い致します。

令和六年度も県内外の大会でたくさんの方々が入賞されました。誠におめでとうございました。今年度も会員皆様の大いなる冒険心を開花させ、尚一層のご活躍を祈念致します。有難うございました。

〈千技子〉